

## 地域の教育力の原点を探る

— NPO法人子どもネットワークセンター天気村 —

山田 貴子

■ 中学教師時代、社会の歪みは弱者に出ると感じていた私は、荒れている子どもたち、閉じこもっている子どもたちの姿を目の当たりにして、何が子どもたちの心をそうさせているのか真剣に考えようと思いました。しかし、現実には自分自身の今までの生き方のなかに、とにかくいい高校へ、とにかく名の通った大学へと、ただただ観念的にしか存在しない怪しげな将来のために、充実できたはずの一日一日の生き方を放棄していたもう一人の自分という存在があり、実際今やりたいこととやっていることのアンバランスな自分が、子どもの前に立って、心を通わせることができるのだからかと考えたとき、心の中で何かがパーンとはじけたような気がしたのです。「もっと素直に正直にやりたいことをやっていこう。そして、もっと身近に子どもたちの心の中にとびこんで共通の運命にかかわっていききたい！」

そんな思いがふつふつと沸いてきて、みるみるうちに心がこんぺいとうのようなかたちになっていったのです。

もしかしたら、こういうことが人の意識改革というものかもしれない。みなさんもお存知のとおり、こんぺいとうというお菓子は、たくさんの突起があらゆる面に伸びています。その一つひとつの突起が、してみたい、やってみたいという小さな願い、好奇心、やる気のかたまりのように思えます。人はいつも、このような内なる願い、希望を忘れてはいけないと思います。

私は私自身のこのような出逢いの深まりのなかから、なにか私にできる使命のようなものがあふれ出てくるのをその時感じ、未来を担う子どもたちのために、私にしかできないことをやろう、そして子どもたちを前にして自分を一杯生きてみようと思ったのです。

■ 一九八七年、子どもたちの周辺に起きている問題にたいして、子どもたちをとり囲む環境を考え直そうと、子ども、大人、障害をもつもたないに関係なく、さまざまな方面からかわる任意団体「天気村」を設立。一九九九年四月、NPO法人格を取得し、「NPO子どもネットワークセンター天気村」と改め、活動しています。

天気村の活動内容ですが、子ども、大人、地域と、三つの分野へのエンパワーメント支援、（これらはお互いに影響しあい、つながっているということを前提にして）、なかでも未来を担う子どもたちのサポートを中心に、ひとつづくり、ま

ちづくり、環境づくりをすすめています。  
まず、子どもたち自身に「生き抜く力」をつけるためのサポートとして、こんべいとう幼児野外体験、なつとう（障害児、健常児の共生共育の場）、こんべいとうクラブ（こんべいとう卒業生のためのお泊り会、フィールドワークショップ）、ボランティアグループ一歩などの活動を展開しています。

私は今、多発している子ども問題についてその解決のためにはどうしたらいいのかを考えるに、それは「仕組み遊びの場」を提供することにつきると思っています。

あまりにも子どもに注目しすぎて、子どもを傷つけてはいけない、ストレスから守ってやろう…などと干渉しすぎること、子どもに考える機会すら与えない状態ではないでしょうか。まずは子どもを親の目からはなして、思いつ

のです。

そんなのんきなこと言って、もし事故でも起きたらどうするの？と非難轟々言われそうですが、人生、いつもそう思い通りにはいかないものです。どんな災害が起こるかも予測できないなか、子どもたちの個性を大切にしながら、いろんな事件をいっしょにくぐりぬけていくうち、「たいてい」のことは、なんとかやれるもんやなあ」といった自信のようなものが身についてきて、これこそが「生き抜く力」ではないかと確信しています。たとえば、自分の身は本気で自分を守ろうとしない限り、ケガにつながる事故になるということを何回かのケガの積み重ねを経験すること子どもたち自身が理解しています。集団で危険な場に遭遇した時は、言葉をかわす間もなく、スタッフが危険に対処しようとする気持ち（ハチの巣が目の前にあり、大群がいた時など）を心のテレパシーで感じとり、じつと静かに座りこんで身を守る態勢をとっています。

こんなふうに、その時その時のドラマをスタッフと仲間との強いつながりのなかで何回もすりぬけていくと、知らず知らずの内に子どもたち自身のなかに、真剣に自分のおかれている状態と対峙して、自分で今の状態を把握し、考え、工夫し、解決していくこうとする力がついていくのを感じるのと同時に、仕組みない冒険や遊びや創造の時間をいっしょに過ごすなかで、子どもたちはすばらしく成長をする

きりあそばせてやりたい！あそびは子どもの仕事のようなものですから…。

山の中の冒険遊び場づくり。田植え、稲刈りの体験。土を掘っての落とし穴づくりでは土の中に生きているミミズ、ムカデ、トビ虫などもご対面。掘った土で粘土をつくり、野焼きをする。湖や川でくちびるが青くなるまで水遊び。山の中の探検は、もう何が出てくるかわくわくドキドキ。ケガは自分の責任もち！「先生、今日はどこへ行くのですか？」と聞かれ、「いやあー、子どもの人数、機嫌具合、お天気、季節によってその日の出発時に決まるので…」という返事をする、たいていのお母さん方はびつくり仰天されます。

野外活動というと、地図を片手に入念な下見と人数制限、そして、何回かの充分なスタッフの打ち合わせ…と。こういうことが常識になっています。でも、こういうことが当たり前になっていく野外活動に変だな？って思えないと、NPO子どもネットワークセンター天気村はどうてい理解してもらえないところなんです。大体、自然を相手にどうして時間スケジュールがいるのでしょうか？臨機応変！自然のメッセージはフットワークよく、頭を柔らかくしていないと心に響くはずはありません。「天気村」というネーミングのごとく、どこへ行くか、どんなことをするのか、それは風の吹くまま、気のむくまま…おてんとさまのいう通りな

のだということを感じているのです。

■ また、子どもにはテレパシーがあると思っています。ともに遊んでいて、「以心伝心」の経験を何度も積み重ねていくうち、まるでアース線が地下に電気を流すように目に見えない思いがお互いになんとなく通じていることに気づきます。そう思うと、子どもがどう育つかのカギは、周りの大人たちの生き方にあると思えます。大人と子どもの伝え合いだと思えます。私たち大人自身が感じていること、話したいことをつなぎ合わせて、煮つめて、自分自身を発見していく。その輪の中で子どもたちは社会を自然に感じていくのだと思います。だから、大人も元氣にならなくては…！ということ、お母さんたちの自主活動の場である「マーブルチョコの会」を発足。（基本的に、好奇心、やる気はこんべいとうのイメージで。とにかく、このネーミングはこんべいとうの突起が少しとれてきて、心がまるくなってきたイメージのお菓子は何だろう？ということでした。）子どももステキな笑顔に触発されて、お母さん方も野外に行く親子バス遠足などを企画をする、積極的に出てこられます。日常生活から少し離れ自然を前にすると、どういふわけか胸の鼓動が高鳴り、言葉では言い表せない心地よい時間を過ごせるそうです。このように子どもと大人を元氣にさせるエネルギーの源はいつたい何なのだろう？こんなにも影響を与えるものって何なのでしょう？

自然、田園、田舎、どう言い換えてみても、私たちが普段とは何か異なったものを感じて、癒されたり、リフレッシュされたりするのだとすれば、それは単にのどかな風景やきれいな空気だけが問題になっているからではなく、そこに生育する野菜や稲、植物や動物たちの生命と接近する、あるいは、いつも生命の世話をしている人々のもつ温かさ、に接するからにちがいありません。

どんな生命も一人つきりでは生きられない、それは生命の原理です。そういうことが身体の中で感じられると、創造が生まれてきます。少し脱線しましたが、この生活のなか、くらしのなかから生まれてくるこの創造がNPOの領域だと思えます。

■そこで、三つ目の事業として、地域を元気にするためのサポート活動について述べたいと思います。

天気村に何らかのかたちでかかわった人たちは、いままでより五感、六感がよく働き、新しい自分を発見したり、街や生活そのものに疑問をもったりするようになります。そして、政治にしろ何にしろ、完璧なものはないのだということ、また、どのように精いっぱい生きても、人はいつまでも未完成で、いつも人からメッセージを受けるものがあり、そのことが人のもっている名譽であり、人のもつ可能性そのものだということに気づくことができます。したがって、一人ひとりの意思や考えを大切にし、それ

それを生かそうと考える。調和してハーモニーを奏でられるにはどうしたらいいのだろうか、ということを考え創造していくのです。人と人はいままでは道すじがちがついていても、それがちがついていたからこそ感動的に出会うことができ新しい何かが出されるという発想です。生活の場から五感を通じた、人と人との結びつきそのものを目的にしている、暮らしの場からの発信なのです。

こうして、五感、六感を研ぎすまし、生活のなかで感性のアンテナをはることで、地域には宝物がいっぱいあるということに気づきます。駅、郵便局、公園、川、森、林、神社、寺、山、また地域には多彩な人が住んでいます。このようなすばらしい街の財産を子どもたちに遊びを通して知ってもらいたい。しかし、今の地域は教育の場としてはきれいに範囲が区切られていてつながりがありません。きれいすぎる(ゴミはいっぱい落ちてくるけど…)。きれいに整いすぎては子どもにとつてはおもしろくないのです。イメージとしては地域が迷路のようになっていて、おもしろい壁がたくさんあった方が、子どもはエネルギーをためるので

す。地域、施設、縦割り行政での企画、学区、…なんでもかんでも、街の財産をませあわせてカオスにする。カオス状態に子どもをほおこむと、子どもは遊び感覚で街を知り、街の人と出逢い、自ら学びたいと思うことをさがしていく。

このようなプロセスは今、私たちの自主事業「こんべいと幼児野外体験保育」に参加している子どもたちの成長のプロセスとよくにているのです。二〜三歳の子どもたちがこんべいとうに来て、自然体験を重ねていくうちに、私たちスタッフにたいして関心と愛着と信頼を深めてきてくれるのを感じるのですが、子どもたちの心の内部に私たちスタッフにたいする信頼感がなければ私たちのことを知りた

い、そして、いっしょに遊びたい、話したいという思いは出てこないはず。この子どもたちとスタッフとのお互いの信頼関係構築へのプロセスが子どもと街との信頼関係の構築、つまり地域で子どもを大事に見ていくという、これからの課題のヒントになると考えています。

■ 私たちは子どもを大事にしようと思っただけで、教育に携わろうとは思っていません。日々の暮らしのなかで、子どもを大事にするということはどういうことか、ということを考えているのです。その子の年齢、その子の個性、成長に応じて、その時期その時期にやれることは何でも体験させてあげようという思いです。行動です。従って、子どもをできるだけたくさん多種多様な性格、あらゆる人への出逢いの場をつくり、体験を共有していくなかで、子どもたちが仕掛けてくるさまざまな行為に真に正面から応えていくことが大切だと思っています。幼児だけに限りません。小、中、高校生、大学生であつてもです。意見が

違つても「まっとうに応答する」という態度、切実な欲求や日常生活で抱えているさまざまな問題にたいして、はっきりと「思いを出し合う」ことを目指しています。

子どもはいつの時代も変わっていません。子どもは地域の宝です。財産です。子ども(=宝物)を大事にしたいという視点を忘れることなく、子どもと出逢いたいものです。そういう視点を接すると、「北風と太陽」の童話のように、子どもたちはマントを脱ぎ捨て、本来の姿をみせてくれます。「子どもと出逢う」という感動を、仕組み遊びを通して体験してもらいたい。子どもほど、この世の中に感動を与えてくれる「宝物」はないのです。子どもと出逢い、宝物をガッチリ受け止める。同じ体験を共有して、同じ気持ちになつて、笑つて、泣いて、おこつて、すねて…。人間のもつあらゆる感情を人とかかわつて体験する。こういうたかかわりを重ね、より多くの大人が地域に関心と愛着と信頼をもつてもらえるようにと人の心を耕していく。農業でいえば、より豊かな土壌をつくる。ミミズ的存在がNPOの教育に携わる領域だと考えます。土壌は無農薬であること(仕組みないということ)、耕されること(かわりを体験し深めていくことの積み重ね)が大事であつて、そういうことが「地域の教育」だと思っています。

(やまだ たかこ NPO子どもネットワークセンター 天気村代表理事)